

8月1日

あなたはどこへ行くのか
創世記16章1～16節

16:1 アブラムの妻サライは、彼に子どもを産まなかった。彼女にはエジプト人の女奴隷がいて、その名をハガルといった。16:2 サライはアブラムに言った。「ご存じのように、【主】は私が子どもを産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれるでしょう。」アブラムはサライの言うことを聞き入れた。16:3 アブラムの妻サライは、アブラムがカナンの土地に住んでから十年後に、彼女の女奴隷のエジプト人ハガルを連れて来て、夫アブラムに妻として与えた。

16:4 彼はハガルのところに入った。そして彼女はみごもった。彼女は自分がみごもったのを知って、自分の女主人を見下げるようになった。 16:5 そこでサライはアブラムに言った。「私に対するこの横柄さは、あなたのせいです。私自身が私の女奴隷をあなたのふところに与えたのですが、彼女は自分がみごもっているのを見て、私を見下げるようになりました。【主】が、私とあなたの間をおさばきになりますように。」 16:6 アブラムはサライに言った。「ご覧。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。彼女をあなたの好きなようにしなさい。」それで、サライが彼女をいじめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。

16:7 【主】の使いは、荒野の泉のほとり、シウルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、 16:8 「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と尋ねた。彼女は答えた。「私の女主人サライのところから逃げているところです。」 16:9 そこで、【主】の使いは彼女に言った。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」

16:10 また、【主】の使いは彼女に言った。「あなたの子孫は、わたしが大いにふやすので、数えきれないほどになる。」

16:11 さらに、【主】の使いは彼女に言った。「見よ。あなたはみごもっている。男の子を産もうとしている。その子をイシュマエルと名づけなさい。【主】があなたの苦しみを聞き入れられたから。

16:12 彼は野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼はすべての兄弟に敵対して住もう。」

16:13 そこで、彼女は自分に語りかけられた【主】の名を「あなたはエル・ロイ」と呼んだ。それは、「ご覧になる方のうしろを私が見て、なおもここにいるとは」と彼女が言ったからである。

16:14 それゆえ、その井戸は、ベエル・ラハイ・ロイと呼ばれた。それは、カデシュとベレデの間にある。 16:15 ハガルは、アブラムに男の子を産んだ。アブラムは、ハガルが産んだその男の子をイシュマエルと名づけた。

16:16 ハガルがアブラムにイシュマエルを産んだとき、アブラムは八十六歳であった。

礼拝説教

あなたはどこへ行くのか

先週はアブラハが
信仰の確信を持つために
語ってくださった、

実物、星を見せながら、神様の創造の力を示
してアブラハムが信じるように語り、
最後に、当時の契約の方法を用いて
神様の約束を信じるように働かれました。

3節には、アブラハムが約束の地、
カナンに来て、10年の歳月が流れました。

この約束の地に来てからも
様々なことがありました。

飢饉でエジプトに行って
大きな失敗をしました。

ロトとの土地争いがありました。

ケドルラオメルの上ドム侵攻、
ロトを救済する戦いがありました。

この間、神様は何度も何度も
アブラハムに語り、
信仰の励ましをされました。

アブラハムでさえ、約束の地に
生活をしていても
問題との戦いの連続です。

16:1 アブラムの妻サライは、彼に子どもを産まなかった。彼女にはエジプト人の女奴隷がいて、その名をハガルと叫んだ。16:2 サライはアブラムに言った。「ご存じのように、【主】は私が子どもを産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。たぶん彼女によって、私は子どもの母になれるでしょう。」アブラムはサライの言うことを聞き入れた。

子孫が与えられる、と言う約束を受けていた
が、10年の年月、祈り続けましたが
サラには子供が与えられませんでした。
当時は子供がたくさん与えられることは祝福のし
るしでした。

祈っても祈っても子供が与えられないサラは涙
の祈りをしていました。

そこでサラは当時、
カナンの地で行われていた習慣
そばめによって子供を得る方法に
目をとめ、アブラハムに提案しました。

アブラハムは
熟慮しないで、
お祈りもしないで、
御心を尋ね求めることをしないで
すぐにその提案に乗りました。

その結果

16:4 彼はハガルのところに入った。そして彼女はみごもった。彼女は自分がみごもったのを知って、自分の女主人を見下げるようになった。

16:5 そこでサライはアブラムに言った。「私に対するこの横柄さは、あなたのせいです。私自身が私の女奴隷をあなたのふところに与えたのですが、彼女は自分がみごもっているのを見て、私を見下げるようになりました。

サラの怒り、悔しさ。

譲歩して譲歩して

産みの母の座をハガルに譲ったのに

奴隷ハガルは女主人サラさんを見下げるようになってしまった。

見下げるようになってしまった。

「主が、私とあなたの間をおさばきになりますように。」

サラは自分から提案したのにアブラハムのせいになっています。

16:6 アブラムはサライに言った。「ご覧。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。彼女をあなたの好きなようにしなさい。」それで、サライが彼女をいじめたので、彼女はサライのもとから逃げ去った。

アブラハムはなすすべもなく、
不信仰、無責任、家父長としての責任放棄

ハガルはサラの怒り、嫉妬、アブラハムの無責任
な行為によって

追い出され、荒れ野をさすらい、
胎のことともに餓死する羽目にな
ってしまいました。

アブラハムは何をすべきであったでしょうか

アブラハムは子供が与えられる
と言う信仰に堅くたつべきであった。

サラの提案と一緒に祈るべきでありました。

アブラハムは今まで祭壇を築いて祈り、
御心を求めて来ました。

ネゲブでの飢饉の時、祈らずにエジプトに行って大失
敗をしました。

ここでも同じような失敗を繰り返しています。

一人で祈れなかったら、夫婦で、連れ合いがクリスチ
ヤンでなかったら、クリスチヤンの友、また牧師と祈るこ
とも大切です。

サラ、あなたの気持ちはよくわかるよ。

でも信仰を持って待ちましょう。

一緒に祈りましょう。

これで世界の歴史は変わったかもしれません。

この世の法律、習慣、未信者の間で
許されていることであっても
神様はお許しくださるか、
御心にかなっているか
聖書はどのように書いているか、
神様は喜ばれることかを吟味するべきでありまし
た。

サラはいかがすべきでしたか。
サラも祈って、信仰を持って待つべき
この世の習慣に頼るべきではなかった。

サラには不妊の女という悲しみがあり、それが潜在的な劣等感になっていました。口では子が生まれないのは神様の計画、神様の摂理と告白していましたが、子を与えてくださるのは神様です。この信仰にたてば、たくさん子供を産んで誇る必要もない。また子供が生まれなくても、悲観的に思ったり、劣等感を持つ必要もないことでもあります。

背が高い、背が低い、本人の責任ではありません。遺伝的な面、それらを支配している神様の御手のわざであります。

豊かな家に生まれる、貧しい家に生まれる、健康な体で生まれる、虚弱な体で生まれるこれら神様の計画、摂理、でありますから誇ることも劣等感を感じることもしてはいけないこと。

そこに神様の計画を見ながら、主の栄光を現すべきであります。

ハガルが身ごもってサラを見下げるようになった。

そして怒り狂った。

これはサラの中に不妊の女という
痛み、劣等感が爆発してしまいました。

ハガルはエジプトの奴隷。
神様のことをしらなかつたかもしれません。
だからすぐに妊娠して
喜び、喜びのあまりサラを見下げるような
高ぶった言動になりました。
これも奴隷という劣等感、屈辱が
アブラハムの子を宿していると言う
高ぶりの原因になっているでしょう。

神様の主権、計画、摂理を徹底的に認め、
それを受け入れること。
それによって劣等感や高ぶり、プライドから
解放され続けることが大切です。

アブラハムからもサラからも追い出されたハガルは
ふるさとのエジプトを目指してさすらいの旅をして
います。

激しい日差し、水のない荒れ野で
死の寸前、主の使いがハガルに声をかけまし
た。

どこから来て、どこへ行くのか？

アブラハムからもサラからも
見捨てられたのに
主はハガルをお見捨てには
なりませんでした。

「あなたの女主人のもとに帰りなさい。
そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」

世の中の身分制度ではなく、
神様の召されたところで献身していくことが大切
です。

社長や大臣になることだけが神様の前に尊いこ
とではありません。

神様の召してくださった場所、
召された状態、
しもべであるなら信仰と誇りを持って
しもべに徹して主の栄光を現すことが求められて
います。

ハガルからイシュマエルが生まれました。

イシュマエルの子孫から
アラブ人が生まれました。
アラブ人のマホメットから
イスラム教が生まれました。

野生のロバのような好戦的なイスラムのアラブ諸
国と西側諸国の間に絶えざる戦いがあります。

アブラハムがさらお祈りしよう、
主の御心を求めよう
といて祈っていたなら

世界の歴史は変わったかもしれません。
私たちの祈りに世界の歴史がかかっています。
祈りましょう、祈りの生活をしましょう。

祈り